

楽天知命——天を楽しみ、命を知る。「易経」にある言葉である。

天とは、与えられた環境、境遇と解してよいだろう。与えられた境遇の中で楽しみを見出し、自らの使命を知り、その使命を果たしていく。そういう生き方をしなさいと示唆した言葉と理解できる。

天はまた、天の道理ともいえる。天は人にさまざまな禍福吉凶を与え、その流れを天の道理と知り、天を恨まず、人を咎めず、誠を貫く生き方をせよ、との教えでもあろう。

天より与えられた天命、資質を楽しみ、それを發揮することに力を尽くし、使命ある人生を生きよ、と教えた言葉とも解せる。

自らの使命を悟った人は、人生を安らかに楽しむことができる。私たちはそういう先達を多く歴史に持っている。

このほど出版された『人生に生かす易経』（竹村亞希子著）に、太公望の逸話がある。太公望は、武王が殷の紂王を滅ぼし周王朝を建国するのに力を尽くした軍師である。伝説の多い人だが、これは周の文王がまだ周部族の首領だった頃の話。素晴らしい人物がいると聞いて訪ねていくと、太公望は釣りをしていた。

「釣れますか」と文王が聞くと、返ってきた答えはこうだった。「わしは魚を釣っているのではない。国を釣っているのだ」

文王はぜひ力を貸してほしいと頼んだが、太公望は二度断り、三度目によくやく応じた。三顧の礼は三国志以前にもあったわけだが、驚くのはその時の太公望の年齢である。すでに七十歳を過ぎていたのだ。七十歳にして初めて軍師に抱えられたのである。

太公望は常に最前線に出て戦ったが、八十歳までは負け続けて、一度も勝てない。勝利の女神が微笑んだのは九十歳の時。牧野の戦いで殷王朝を滅ぼし、ようやく軍師の面目を施したのである。

著者の竹村さんはいう。

「太公望はおそらく大変な葛藤を抱えていたでしょう。それでも七十歳になるまで悠々と釣りをしていた。そこがすごい」

楽天知命の人生を全うした人の姿である。

本誌連載の執筆者井原隆一さんもまた、楽天知命の人生を生きている。今月号掲載の「老感没却」にその面目が躍如である。

井原さんは今年九十七歳。毎朝四時に起き畑仕事をし、高らかに歌い、「二年三百六十五日とするから九十七歳。一年七百三十日と思えば四十八、九歳」と笑い、三、四百歳から二、三千歳の古人を師

に楽しげに学んでいる。その楽天知命ぶりは達人の域に達している。

最後に、住友常務理事だった田中良雄さんの詩を紹介する。楽天知命の人生を生きる心得が、ここにある。

一隅を照らすもので 私はありたい

私の受け持つ一隅が どんないい

みじめな はかないものであっても

わるびれず ひるます いつもほのかに

照らしていきたい